

戦後80年 平和を想い、考え、行動し続ける

非核平和都市宣言40周年

今年は、戦後80年、そして芦屋市議会が非核平和都市宣言を決議してから40周年という、大きな節目を迎えます。この歴史的な年を迎えるにあたり、改めて戦争の悲惨さと、平和の尊さを胸に刻み、未来世代へと継承する決意を新たにしています。

本市では8月23日に、ルネサンス クラシックス芦屋ルナ・ホールにて、戦後80年及び非核平和都市宣言40周年記念「あしや平和の集い」を開催いたします。当日は、小学生の描いた平和ポスター展入賞者表彰式や『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。』映画上映のほか、県立3校の高校生と平和について語り合います。未来世代とともに、誰もが安心して暮らすことのできる平和な社会の実現に向けて、学び合い、行動につなげる機会としたいと考えています。

平和とは、ただ単に紛争がない状態を指すものではありません。私たち一人ひとりが日々の暮らしの中で、平和を想い、考え、行動し続けるプロセスそのものが、平和には必要ではないでしょうか。そのためには、対話を重ねることでお互いの違いを認め合い、協調することが欠かせません。私自身は、今月長崎市で実施される「第11回平和首長会議被爆80周年記念総会」に参加いたします。世界中の首長等とともに平和に向けた取り組みについて話し合う、大変貴重な機会です。平和の実現のため地方自治体としてできる取り組みに加え、戦争を知らない世代に対して戦争の悲惨さ、平和の尊さを伝える取り組みについても改めて考え、国内外に発信していきたいと考えています。

平和は誰かが勝手に築いてくれるものではないと思います。市民の皆さまにも、ぜひ「あしや平和の集い」にご参加いただき、改めて平和について考え、行動するきっかけとしていただければ幸いです。ともに一歩を踏み出しましょう。

2025年8月 芦屋市長 高島峻輔



被爆アオギリ二世の前にて

市役所東館北側の緑地に植えられた「被爆アオギリ二世」は、今年で植樹から8年が経ちました。この木は、昭和20年の原爆投下後に焼け焦げた幹から芽吹いた広島のアオギリの2世です。困難を乗り越えて生き続けるその姿は、今も多くの人に勇気と希望を与えています。

戦火に包まれたまち

一空襲と疎開から見る芦屋の記憶

昭和20(1945)年、日本の戦況が不利になる中、戦場は沖縄から日本本土へと移り、大規模な空襲が全国を襲いました。3月10日の東京大空襲を皮切りに、名古屋・大阪・神戸といった大都市が相次いで標的となり、無差別な焼夷弾(しょういだん)による絨毯爆撃(じゅうたんぱくげき)で市街地が焼き払われました。その余波は中小都市にもおよび、芦屋市も空襲の被害を受けました。最初の空襲は5月11日早朝。神戸市にある航空機製作所を狙った

爆撃の中で、芦屋市にも250キロ爆弾が投下されました。続く6月5日には、2度目の神戸大空襲で焼夷弾が周辺地域にも降り注ぎ、芦屋市にも被害が拡大。そして6月15日には、大阪・尼崎を狙った爆撃の際に、再び芦屋市が巻き込まれました。

戦局の悪化に伴い、こどもたちの集団疎開も本格化しました。6月、精道国民学校(現・精道小学校)と宮川国民学校(現・宮川小学校)の児童あわせて430人が、岡山東上房郡・川上郡へ

と教員に引率されて避難。対象は3年生以上で、1～2年生は地方の親戚を頼る縁故疎開となりました。一方で、793人の児童は疎開せず、芦屋市内に残留しました。そして8月6日未明、戦争末期の最も激しい空襲の一つが芦屋市を襲います。後に「阪神大空襲」と呼ばれるこの攻撃では、100機をこえるB29爆撃機が西宮市から御影方面にかけての市街地を焼夷弾で攻撃。芦屋市街から香櫨園にかけて火の海となり、多くの家屋や建物が焼失しました。



児童疎開の様子 備中高梁駅に着き、移動を待つ児童たち(昭和20年7月)

この空襲の情報はラジオを通じて報じられ、疎開先にも届きました。教員たちは不安を抱えるこどもたちに事実を伏せようとしたましたが、こどもたちはその変化を敏感に感じ取り、やつぎばやに「先生、何かあったの?」「僕の家は?」と問いかけた様子が、精道国民学校の疎開日記に残されています。

芦屋市は、計4度の空襲を受けました。焼失面積は55万9千坪、罹災者は人口の5割にのぼり、家屋の約4割が損壊、特に学校施設は8割が失われるという甚大な被害を受けました。

芦屋のまちは焼け跡から再び立ち上がり、見事に復興を成し遂げました。未来世代へ戦争の悲惨さと平和の尊さを伝えていくことが、私たちができる大切な役割です。

「芦屋市平和記録集」から再編して掲載しています。



戦災地域(赤色部分)が書き込まれた芦屋郵便区全図(昭和21年2月15日作成)〈芦屋市立美術博物館所蔵〉